

算数実践報告書

石井 豪

1 本時における「主体的な学び」について

空欄や数の入れ替え等を含む数表を瞬間的に提示するところから授業を始めた。すぐに、数表の中に数字があったこと、空欄が2マスあったこと等、「数」について着目して問いをもっていることから、分かっていない数について考えることを問題として設定していった。数表の数が88までだったという発言もあったので、いくつかから88まであったのかを問い、1から88までという確認を行った。そして、このことが後の0から100までの数表完成の布石となっていった。児童には、気付きを書くことができるように、余白を調整した数表を配布した。2つの空欄、10の倍数の列の不足、88と99の入れ替えという大きく3つの不備を含む数表を提示していたが、あくまでも教師の間違いという前提で本時を進めた。児童それぞれが気付く不備が異なるために一気に様々な発言が出てきたが、「自分が見つけたことを早く教師に伝えたい」という思い、「自分が気付かなかったことも知りたい」という思いが45分間継続する展開となった。

2 本時における「対話的な学び」について

自力解決直後は、2つの空欄の中に11と26を入れる児童が多かった。26については、「25の次だから」という数の順序に着目した考えで見つけていた。11については、9の次の10がないことに気付き、新たな不備が見つかったことで、11を空欄の中に入れることよりもむしろ10の謎について考えていく流れとなった。指導案の展開とは異なるものであったが、児童の気付きのままに展開していった。見つけたことを伝えたい児童は近くの人と話し合いを始めていたため、全体にも話し合ってよいことを伝えた。話し合いながら考える児童が7割、自力解決を続ける児童が3割程度という状況であった。数表に10が書かれていないことに気付いた後は、20から100までの縦1列も書かれていないことに気付いていった。数の変化に着目した「10とび」という発言もあった。88までの数表だと思っていたものが100までの数表であったことへの気付きの少し後で、「100の1つ前が88ではおかしい」「88と99が入れ替わっている」という気付きが出てきた。児童から3つの不備について一気に発言が出てくるようになってきたため、教師がどこから話をするかコーディネートしていくこととした。改めて空欄の中に入る26については扱った際に、他の見つけ方があると挙手した児童の考えは、6から縦に見て、10とびで26を見つけるものであった。ただし、このときの説明の内容は「縦に6が並んでいる」というものであったために、教師は□の中に「6」とだけ書くこととした。すると、一斉に6ではなく26であることを指摘する流れとなった。「伝えたい」思いが溢れていたため、児童は自然と黒板の数表に集まってきて各々説明を始めた(図1)。納得する反応の声もあり、「知りたい」という思いも溢れる児童の姿であった。説明の中で、横に見たときに「十の位が2で同じになっているから」という根拠となる考えが出てきた。そこで、横の見方、縦の見方についての気付きを板書して整理することとした。整理の後、数表の右側ではなく左側に10の倍数の列が入ると発言した児童がいたため、0から100までの数表についても児童の発言から完成することができた。



図1 集まって話合う児童

3 本時における「深い学び」について

横と縦の見方について整理した後で、26の見つけ方として、斜めに見ても分かる発言する児童がいたため、全体でその意味をとらえる時間を設けた。斜めに11ずつ大きくなっていることを見いだすと、88と99の入れ替えについても、この斜めに見たときの11ずつの変化という視点で改めて再考することができていた。十の位と一の位が同じ数として、11から99が斜めに並んでいることには気付いていなかったが、「なぜ11ずつ大きくなるのか」という縦と横の見方を合わせる考えに向かう問いをもつ発言があった。このように、答えが分かった後でも、別の見方で考え直して学びを深めていく児童の姿があった。



図2 最終板書